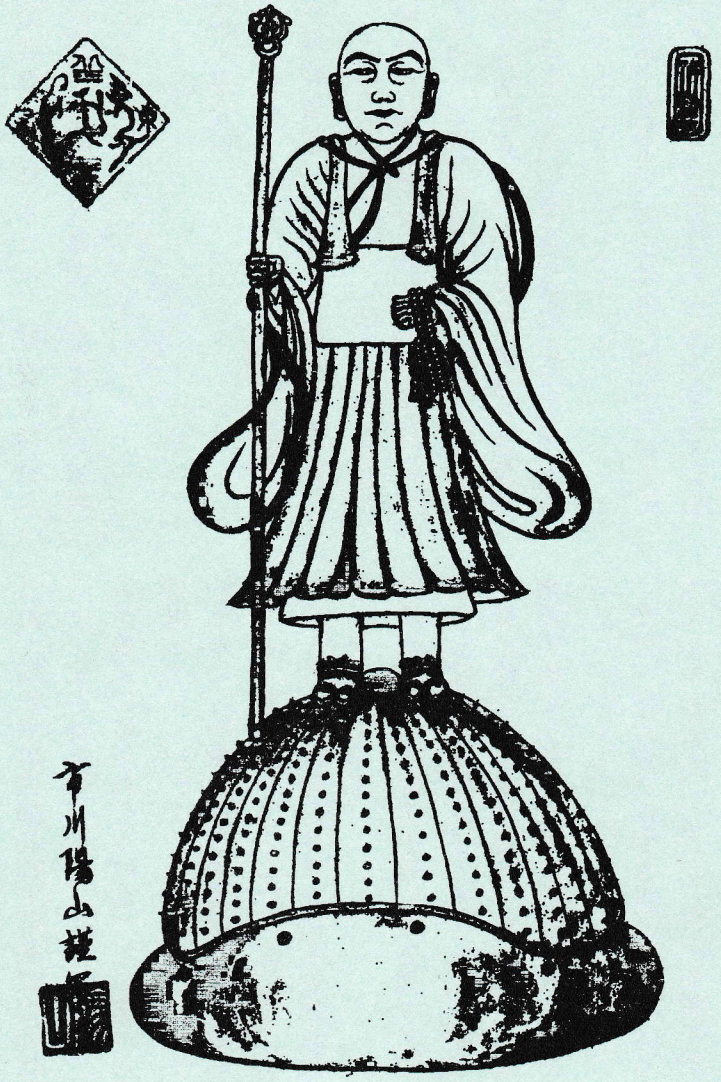
第２４号　　平成１８年１２月発行

みおしえ



熊谷蓮生坊大愛像

平成18年は熊谷法力房蓮生法師の八百年遠忌です。

平成23年には法然上人の八百年御忌を迎えます。

埼玉教区浄土宗青年会
http://www.saijousei.com

一途に「みおしえ」を求めて

― 法力房蓮生法師（熊谷次郎直実公）―

埼玉県出身の人物として、知っておいて頂きたい人物がいます。

源頼朝に「坂東一の剛の武者」と称された、平安末期から鎌倉時代にかけて、その名を馳せた坂東・武蔵国、熊谷出身の武将**熊谷次郎直実**（くまがいじろうなおざね）です。

「十六年はひとむかし。夢だ、夢だ。」

歌舞伎をご覧になる方には説明の必要もありませんが、『平家物語』を元にした直実公が主人公の演目、『熊谷陣屋』の最後、花道を走り去る名場面です。

今でも人々に愛され続ける埼玉の名将、直実公には、知っておいて頂きたい名前がもう一つあります。

その名は法力房蓮生法師（ほうりきぼうれんせいほっし）、浄土宗の「みおしえ」お念仏を頂く私たちにとって、決して忘れてはならない、念仏の信仰の大先輩です。

平安末期から鎌倉時代にかけて、「保元・平治の乱」をはじめとして、平氏と源氏、親子兄弟、入り乱れての殺し合いが行なわれていました。その中において直実公が「坂東一」とまで称されるだけの武勲を挙げる事は、またその中で生き残っていく事は どれ程凄まじい事であったでしょうか。「人を殺める」という事、それが手柄・名誉になりもこそすれ、それを咎める者もおらず、それに対して疑念を持つ者もいない時代でした。そうしなければ名誉や地位、そして所領、さらには自分の命さえも守る事が出来なかった時代です。

その時代にありながら、直実公は武士としてのすべてを捨て、法然上人を尋ね、「蓮生法師」として浄土を求める念仏行者としての道を歩む事となったのです。

直実公が蓮生法師となったきっかけは一つではありません。武勲を挙げていく中、自分の息子の歳ほどの平家の公達・平敦盛公を討ったこと、放生会の流鏑馬にて下級武士の仕事である的立役を命じられたこと、また命を懸けて守らねばならない自分の領地を、叔父である久下直光に取られそうになってしまった事など、いくつかのことが続きました。

しかし、一番大きな理由は、歳を重ねるごとに感じる「無常さ」、そして「このままいけば行く先は地獄」という自分の今までの生き方を振り返っての思いだったのです。

直実公は「人が人を殺し生き残っていく」という時代の武士であったし、その時代や身分に忠実に従い、主君の為に一所懸命に命を懸けた者であったからこそ、無常を感じ「蓮生法師」となられたのでしょう。

では、今の時代の我々はどうでしょうか。法を犯すという一線は越えていなくとも、「地位」や「名誉」や「財」を求め、ありとあらゆる事をする、という事において私たちは、なんら変わりのない生活を送ってはいないでしょうか。そうしなければならない自分に、「だってそうしなければ、生きていけないんだからしょうがない。」「皆もそうしているよ。」という言い訳を、自分自身にしていませんか。その事に疑問を持つことはなかったでしょうか。私たちの行く先はどうなるのであろうか、と今まで想像した事はなかったでしょうか。

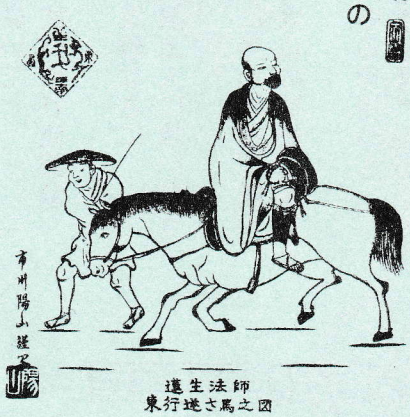
法然上人を前にし、「お念仏を称えれば必ず救われる。」その「みおしえ」の真髄に触れたとき、誇り高き武士であった直実公は筋骨たくましい大きな身体で大粒の涙を流されたそうです。

その法然上人のお念仏の「みおしえ」を前に、私たちは自分自身を見つめ、どんな事を考えたらよいのでしょうか。

表紙の絵は『熊谷蓮生坊大霊像』です。直実公のお館・念仏の草庵跡地に建てられた熊谷（くまがや）・熊谷寺（ゆうこくじ）にある、今から五〇年前・蓮生法師七五〇年遠忌（七五〇回忌）を記念して建てられたものです。

兜の上に立つ蓮生法師の姿は身を守る「鎧」や「兜」よりも、心を守る「墨染めの衣」のほうが勝っているということを表しています。地位や名誉のために人を押しのけて生きる武士よりも、縁のある人もない人も、ありとあらゆる人々と共に、阿弥陀様の極楽浄土の蓮の台に生まれたい、と願った、蓮生法師の御心を映した霊像です。

熊谷寺にはもう一つ有名な絵が残されています。法然上人がお住まいの京都・吉水の草庵から故郷である熊谷の地に戻られる蓮生法師のお姿で、阿弥陀さまのいらっしゃる西に背中を向けないようにと馬に逆さまに乗る『**東行逆馬図**』です。



蓮生法師
東行逆さ馬之図

「浄土にも　剛のものとや　沙汰すらん
西に向かいて　後ろみせねば」

このお歌は、その時の蓮生法師が詠まれたものです。剛の者とは、一つの道を求める勇者のことです。武士として「命を懸けて主君に仕える」という「剛の者」から、阿弥陀さまを慕い、念仏をひと筋に称える「剛の者」へ。己の罪を懺悔し無力さを知り、救いの道を求めて法然上人のみおしえを一途に信じた、「阿弥陀さまの宮仕え」として「決して背中を見せないように」と、一途な思いをかける「剛の者」としての蓮生法師のお姿です。

そのお姿を伝え聞いた法然上人は、蓮生法師を「**坂東の阿弥陀ほとけである。**」と称されました。法然上人がお弟子を讃えるのに、「阿弥陀ほとけ」という言葉を使われたのは、数多くの弟子の中でも蓮生法師ただお一人に対してだけなのです。

蓮生法師は、念仏庵（現在の熊谷寺）で、人々に見守られながら、端坐合掌し、お念仏を称える中、往生されました。

お念仏にご縁を頂いている私たちは、もし「埼玉にこの人あり」と問われた時、それは「蓮生法師」と答えて頂きたく思います。法然上人に教えを請い、ここ関東の地に初めて法然上人のお念仏の種を蒔いてくださった信仰においての大先輩を、誇りに思って頂きたいのです。

そして「一途に道を求め続けた」その姿をお手本に、毎日お念仏の中での生活を、私たち自身も送ることができたらと考えています。

発行者　埼玉教区浄土宗青年会
会長　吉田真典
文責　埼浄青編集委員会

『蓮生法師和讃』

作詞　漆間淳郎
補作詞・作曲　松濤基道

1、坂東一の剛の武者　義朝公に従いて
　武勲も高し　その名こそ　武州熊谷直実公

2、寿永の昔一の谷　敦盛討ちて果敢なさに
　吉水禅房訪ねては　法然上人に救い乞う

3、全て投げ捨て縋りなば　そこに浄土の花ぞ咲く
　法然上人膝下にて　念仏の功徳に涙する

4、大原問答　危機に立つ　上人守る斧持つも
　かえりて教え諫められ「斧替名号」授かりぬ

5、師の大恩に感泣し　美作久米の生誕地
　屋敷の跡地そのままに　誕生寺をば建立す

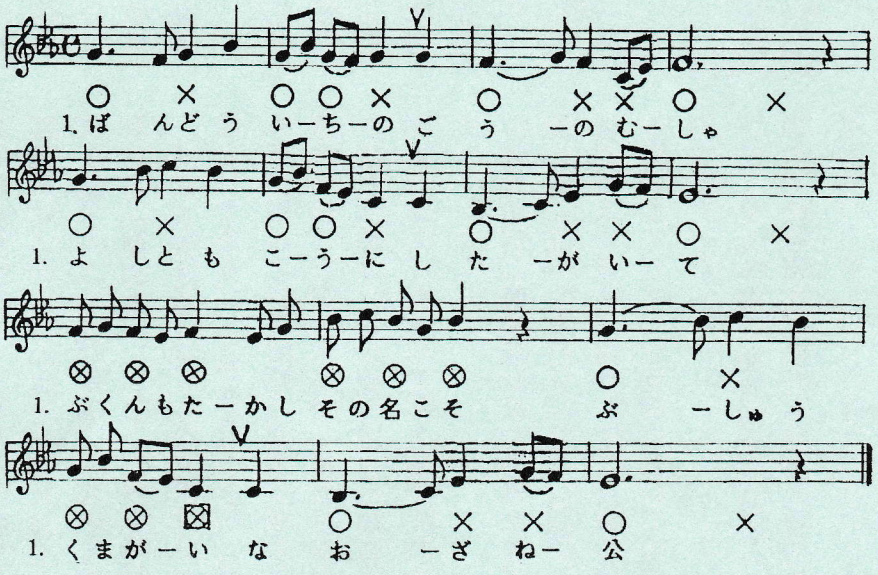
6、尊き念仏のみ教えを　武蔵の民にも分かつべく
　「不背西方」の逆さ馬　南無阿弥陀仏と東行す

7、藤枝宿にて蓮生坊　これを路銀の代わりにと
　質に入れたるお念仏　阿弥陀ほとけに化わりける

8、有縁無縁の衆生をも　共に浄土へ生まれんと
　願い　その名も蓮生坊　上品上生の願を立つ

9、坂東最初の念仏道場　往生予告の蓮生坊
　たなびく紫雲や芳香に　晴れて浄土に生まれけり

10、武州熊谷、熊谷寺　坂東阿弥陀ほとけとて
　今も絶えざるお念仏　なむや、熊谷蓮生坊



◎『蓮生法師和讃』
蓮生法師八百年遠忌を記念して、作られたご和讃です。

編集後記

新しい編集委員となってのはじめての『みおしえ』。今年は蓮生法師八百年遠忌を迎えることもあり、埼浄青の勉強会で、埼玉ゆかりの名僧である熊谷次郎直実公と蓮生法師をテーマに何度か勉強会を行ない、『六時礼讃会』を熊谷寺様で開催させていただいた。

編集委員会で何度も話し合いを重ね、作り上げた『みおしえ』。手にした方々に、少しでも「我々が誇りに思う蓮生法師とはどんな方であったか。」という事が解っていただければ有難いと思う。

様々に御協力を頂いた熊谷寺様には感謝申し上げたい。

埼浄青編集委員長　押野見孝道

発行　平成十八年十二月